

総合型地域スポーツクラブ設立に向けた 「ジュニア体操クラブ」の運営に関する研究

村 田 浩一郎
人間科学研究部門・助教

1. 目 的

文部科学省は、『平成7年度から15年度までの9年間、地域のコミュニティの役割を担うスポーツクラブづくりに向けた先導的なモデル事業として、地域住民の自主的な運営を目指す「総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業」を実施』してきた。現在では、全国で2768団体、帯広市で2団体の総合型地域スポーツクラブが存在している。その中でも、大学施設を活動の主体としている総合型地域スポーツクラブは、環境・人材の両側面において好条件を備えており、注目を集めている。しかしながら、その実施例は極めて少数例にとどまっている。本学での総合型地域スポーツクラブ設立への挑戦は、大学の存在意義として掲げられる地域貢献が、「獣医・畜産分野」だけでなく、「人間の文化的生活の質的向上を担う分野」においても可能であることをアピールするチャンスであろう。

そこで本研究の目的は、帯広市に既存のジュニア体操クラブ（帯広市総合体育館「十勝ジュニア体操クラブ」）に協力を依頼し、その運営の一環として、本学施設でのスポーツ活動を実験的にを行い、ジュニア期における体操競技力向上と、それに伴った育成的なクラブ運営を実施することである。

2. 方 法

2-1. 対象者および練習環境

対象とした団体は、十勝体操協会に所属する「十勝ジュニア体操クラブ」であり、練習は2009年6月3日より開始された。対象者は6歳から12歳まで（小学生）の男子6名、女子1名であり、十勝ジュニア体操クラブ競技選手コースとして招集した。練習日時は、毎週水曜日の17時から20時までとし、本学と自宅間の送迎は各家庭に一任した。練習会場は、本学体育館内テラスと武道場とした。器具は、マット（ホッピングマット（セノー社製）、円馬（あん馬練習器具（ヤンセン社製）、つり輪（ヤンセン社製）、平行棒（自作）を用意した。また、円馬における旋回練習器具および倒立練習器具を自作した。いずれの種目においても安全面に配慮したマットの設置を行い、補助者が常時配置された。さらに、対象者の不測の事態に備えて、月単位での保険加入を義務付けた。

2-2. 地域貢献事業の実施

以下の3項目について、地域貢献事業を実施した。

- ①スポーツ指導者を対象とした事業
- ②一般成人を対象とした事業
- ③体操競技の振興を目的とした事業

3. 結 果

3-1. 競技力について

今年度の競技会参加は4回であった。

2009年9月19日に開催された釧路体操協会主催の「第32回北海道ジュニア体操競技選手権大会 釧路地区予選会」において、3名のみオープン参加した。オープン参加のため順位はつかなかったが、実質順位で3位、6位、7位であった。

2009年10月3日から4日に開催された「旭川市民大会」においては、4名が出場した。同クラスで他のクラブにおける出場がなく、自動的に優勝以下を独占した。しかしながら、エースであるTが鉄棒演技中に落下して、右足首を骨折するという最悪の事態が生じてしまった。演技中の事故であったため、大会期間中の保険が適用された。

2009年10月31日から11月1日に開催された「第32回北海道ジュニア体操競技選手権大会」においては、新型インフルエンザ罹患のため、1名のみ出場となった。出場したUは、個人総合26位（58名中）、種目別の跳び箱で5位入賞であった。

3-2. 本年度実施した地域貢献事業

- ①スポーツ指導者を対象とした事業

2009年11月26日に開催された「平成21年度浦幌町スポーツ講習会」において、『筋トレよもやま話～その基本原理から最新情報まで』のタイトルで講演を行った。浦幌町在住のスポーツ指導者、男女合わせて約30名が参加した。内容として、筋力（筋量）の加齢および不活動による変化から、筋力トレーニングの必要性やトレーニング方法の最新情報について紹介した。

- ②一般成人を対象とした事業

2010年2月22日に開催された「平成21年度帯広市保健普及講座」において、『メタボ解消第1歩～これならできるストレッチ』と題して講演と実技講習を行った。内容としては、国内およびアメリカスポーツ医学会において推奨される、メタボリックシンドローム対策の運動量指標などに関して講義を行い、その実施に向けてのファーストステップとして、ストレッチと簡単な筋力トレーニングなどを紹介した。

- ③体操競技の振興を目的とした事業

2009年6月1日から7月13日（毎週月、水曜日）に開催された「平成21年度帯広市ちびっこ体操体験教室」において実技指導を行った。約40名の小学生が参加し、そのうち2名が十勝ジュニア体操クラブに加入した。内容としては、マット、鉄棒、トランポリンの基本的要素を含んだ「遊び」の中で、体操競技の体験をさせるというものであった。

2010年2月28日に「平成21年度（財）日本体操協会事業委員会 特別普及練習会～金メダリスト鹿島丈博さんとふれあい体操練習会～」を招致し、十勝ジュニア体操クラブ会員への技術指導等を行っていただいた。その詳細は2010年2月15日付十勝毎日新聞15面において、写真入りで紹介された。

4. 考 察

本研究は、帯広市のジュニア体操クラブである「十勝ジュニア体操クラブ」における運営の一環として、本学施設でのスポーツ活動を実験的に行い、ジュニア期における体操競技力向上と育成的なクラブ運営を実施することを目的とした。

まず、選手の競技力については、著しい向上がみられた。体操競技は6種目の総得点を「個人総合得点」として競技するため、それら種目を同程度にトレーニングしなければならない。中学校体育連盟主催の競技会が4種目制を採用していることから、これまでは北海道内でのジュニア大会もそれに倣って4種目制であった。しかしながら、昨今、全国的にジュニア期からの6種目制を推奨する動きがみられ、中学校体育連盟主催の競技会を除く、ほとんどの大会で6種目制が施行されている。その中で、十勝ジュニア体操クラブのように、器具が不足しているチームは練習そのものができず、結果として競技会に参加できないという悪循環を強いられてきた。その点、今年度新たに、ゆか、あん馬（円馬）、つり輪、平行棒の練習器具を本学に導入したことで、北海道ジュニア体操競技選手権大会をはじめとした、競技会への参加が可能となった。これまで選手を指導してこられた十勝ジュニア体操クラブのコーチ陣によって築かれた各選手の土台に、本学施設による新たな練習環境が適応した結果であると考えられる。

現在、十勝ジュニア体操クラブにはホームページが存在するが、今回の調査によって、「帯広」「体操」という最も基本的な検索語でヒットしないということが判明した。ホームページの閲覧数など、具体的な指標に関しては今回調査できなかったが、早急に上記事項について改善をする必要がある。

今年度実施した各種地域貢献事業は、いずれも反響が良く、成功を収めたといつてよいであろう。特に、スポーツ指導者を対象とした講習会（浦幌町）においては、質問のために残ってくださった参加者もあり、スポーツにおける科学的思考の必要性を訴えることができたと感じている。また、体操競技の振興を目的とした事業に関しては、特に、本学人間科学研究部門と共催のイベントである練習会を計画することができた。オリンピック選手を間近にし、その指導を受けることで、選手の目的意識や保護者の意欲をかきたてること、さらには帯広市に対する体操クラブ存在のアピールもできたのではないだろうか。

上記のように実施してきた本研究に、学生の賛同が得られ始めている。現在、「体操部」の設立が申請中であり、8名の学生によって団体が設立されつつある。十勝ジュニア体操クラブとの連携によって、本学学生による地域貢献事業がますます振興され、今後の相互発展が期待される。

本研究によって、十勝ジュニア体操クラブ選手の競技力向上、およびクラブ育成に向けた運営がなされてきた。本学にも体操部が設立されつつあり、本学施設と人材による「スポーツを通じた地域貢献」が遂行される日も近いであろう。これら活動（事業）の積み重ねが、総合型地域スポーツクラブ設立への第1歩であると考えられる。

キーワード：体操，総合型地域スポーツクラブ